開催地名	長野県 筑北村
開催日時	令和6年11月25日(日)14:00～15:30
開催場所	筑北村農村環境改善センター　多目的ホール
語り部	平澤　つぎ子(千葉県旭市)
参加者	78名(社会福祉協議会8名、日赤奉仕団2名、ボランティア連絡協議会1名、シニアクラブ5名、商工会8名、民生児童委員会6名、議会2名、教育委員2名、学校2名、一般7名、村職員26名、長野県3名、事務局6名)
開催経緯	当村では、毎年総合防災訓練の実施や防災出前講座等、地域防災力向上に資する取組みを進めているが、女性の参加者が少数で、女性視点の防災対策が進んでいない。また、男女問わずに依然として公助への依存度が高いことから、女性視点で活動に取り組んでいる語り部から直接話を聞く機会を設け、積極的に発言・行動を促す契機としたい。
内容	■はじめに 講演者の平澤氏は、赤十字のボランティアとして東日本大震災の避難所運営に携わり、防災の現場で多様な支援活動を行ってきた。今回の講演では、避難所運営の実態や自主防災組織の重要性について、実際の体験を交えて語った。 筑北村の人口は約3980人で、男性1992人、女性1988人と若干男性が多い。しかし、今回の講演では聴講者の8割以上が女性であり、平澤氏は「頼もしい」と感じたと述べた。防災の現場では、女性の視点が特に求められる場面が多いため、女性の積極的な参加が今後の防災力向上につながると強調した。 ■自然災害とその脅威 参加者に対し、「自分にとって何が一番怖い災害か」を考えるよう促したところ、多くの人が「地震」や「土砂災害」と答えた。土砂災害には「土石流」「地すべり」「崖崩れ」などさまざまな種類があり、特に山滑りの速度は時速40kmに達することがある。 広島の集中豪雨では、多くの家が土砂災害に巻き込まれた一方、秋田県雄物川の氾濫では、前年度の被災地の教訓を活かし、迅速な避難が行われた結果、死傷者ゼロを達成した。防災の基本は、自然災害の特性を理解し、適切な備えを講じることであると述べた。 ■能登半島地震の教訓 今年1月1日に発生した能登半島地震では、震源地に近い珠洲市では地震発生からわずか1分後に津波が到達した。さらに、多くの住宅が倒壊し、家具の下敷きになって亡くなった人も多かった。こうした事例から、防災は「生きているうちに学び、備えること」が重要であると述べた。 また、能登半島地震の被災地では、その後の豪雨による二次災害も発生した。災害は連鎖的に発生することがあり、一つの災害だけを想定するのではなく、複合災害への対応も視野に入れる必要がある。 ■防災力とは 防災力とは「自助・共助・公助」の3つの力の総和である。地震での死因の大多数は「圧死」であり、家屋の倒壊や家具の飛散によるものが多い。これらを防ぐためには、家具の固定や、建物の耐震化など、「命のあるうちに防災対策を講じること」が重要であると述べた。 ■自助の重要性 東日本大震災の発災時、千葉県旭市では震度5強を観測し、津波によって14名が亡くなり、2名が行方不明となった。地震に伴う「がけ崩れ」「液状化現象」「津波被害」などの複合的な影響も確認された。 また、被災者が詠んだ句として、 「超スピードの汚濁の渦が電柱に　しがみつく命離し連れ去る」 という言葉が紹介され、津波の脅威を生々しく伝えた。 避難所には約3000人の市民が集まり、23時ごろから炊き出しが始まった。避難所の環境は狭く、衛生的にも問題があり、プライバシーの確保が困難だった。特にトイレは水が使えず、汚物をひしゃくですくうなどの苦労があったという。 ■避難所運営の実態と課題 避難所には心身障がい者、高齢者、乳幼児、外国人、妊産婦や傷病者など、多様な要支援者が集まる。これらの人々のニーズに応じた支援を行うためには、女性の視点が不可欠である。特に衛生・栄養・介護・育児面での対応が求められる。 避難所運営では以下の事項が考慮されるべきである。 ・運営本部の立ち上げ ・組織づくりと役割分担

	・避難者の名簿作成と部屋割り ・取材対応 ・支援物資の受け入れと配分 ・食事の手配 ・外部ボランティアの受け入れ 避難所運営には、地域住民の協力が不可欠であり、平澤氏自身も赤十字ボランティアとして、食事の配膳、衛生管理、心のケアなど多岐にわたる活動を行った。 ■共助の力 避難所では、共助の力が大きく影響する。例えば、関東大震災では、住民総出のバケツリレーにより火災を食い止めた事例がある。また、阪神淡路大震災では、倒壊した家屋から生き埋めになった人々の多くが「自力」「家族」「地域住民」の協力で救助されている。 東日本大震災では、「釜石の奇跡」と呼ばれる事例があり、日頃からの防災学習により、子どもたちが率先して避難行動をとった結果、小中学生の99.8%が助かった。「これは奇跡ではなく、学習により身につけた対応力が想定外を乗り越えた結果である」と、子どもたちは語っている。 ■防災訓練の重要性 自主防災組織が機能するためには、日頃の訓練が不可欠である。実際に行われた訓練では、煙の中での避難訓練、AEDの使用、はしご車による救助体験、子どもたちによる防災食の調理など、幅広い活動が行われた。また、メディアで放送された小学生による段ボールベッドの組み立て実習も紹介された。 ■まとめ 最後に、参加者に「防災力を高めるために最も重要なのは何か」と問いかけると、多くの人が「自助」や「共助」と答えた。平澤氏は「災害時、公助には期待できない状況が多い。だからこそ、自助・共助が重要であり、自分たちの地域は自分たちで守るという意識を持つことが必要だ」と強調した。 「ご清聴ありがとうございました。」と締めくくり、日常生活に防災を取り入れることの大切さを訴えた。
開催地より	参加者より「自助・共助の重要性に加えて、女性の参画・女性視点によるきめ細やかな対応が必要不可欠と理解でき、今後は積極的に取り組みたい」との声もあり、女性の参画をさらに促し、女性視点による防災力の強化をしていく。